

# 今、青年たちは



池 谷 壽 夫

(高知大学・教育学部)

はじめに

今青年の意識や行動はどうなっているのだろうか。この問題を考える際、まず第一に子どもとの連続性の中で青年をとらえる必要があると、私は思っている。というのは、さまざまな調査を見ていくと、子どもも青年もほとんど同じような状況に置かれているのではないかと思えるからである。その上で、青年が固有に抱えている問題を明らかにしていかなければならないだろう。ここでは、前者の連続性という視点から、子ども・青年のいくつかのトピックな

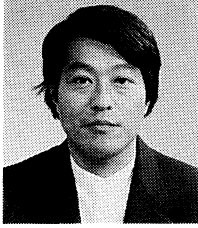
状況を取り出しながら、青年の意識と行動の一端に迫っていくことにしたい。

## □ 尾崎豊に共感し支えられる青年の世界

ロック・シンガー尾崎豊が肺水腫で急逝した。この尾崎のあまりにも早すぎる死に、多くの若者が涙を流し、自分にとっての尾崎とその死の意味するところをそれぞれに考えた。なぜ大人が知らないところで、こんなにも多くの若者を尾崎はひきつけていたのだろうか。

それはなによりもまず、尾崎が同世代の若者として、自

らの存在すら否定されかねない学校社会の中にあっても、  
本当の自分を求めあがいているさまを、自らの弱さをもち  
らけ出しながらストリートに唄っているからであろう。例  
えば、『十五の夜』では、大人たちによって「退屈な授業  
が俺達の全て」とされてしまうことへのいらだちと、「心  
を捨てろ捨てろ」という大人たちから、とにかく自由にな  
りたくて、「盗んだバイクで走り出す」（家出する）十五  
歳の少年の揺れ動く心が描かれている。また『卒業』では、  
学校・教師の「行儀よくまじめ」にしろという強制の中で、  
傷つきながらも、「本当の自分」と自由をひたすら求めあ  
がく少年の闘いが、学校の「支配からの卒業」として表現  
されている。だが多くの子どもと同じように、尾崎にとつ  
ても「支配からの卒業」の先に何が待っているのかわから  
ない。だからひたすら自由を求め続けるしかない。



いけや・ひさお ●一九四八年静岡県生ま  
れ ●専攻は教育哲学 ●主な著書 『共著…  
『競争の教育から共同の教育へ』（青木  
書店、『語り合う青年心理学』（青木書  
店、『拘泥（こたわり）講座』（汐文  
社）など。

『Scrambling Rock'n Roll』で尾崎は、この自由への渴望  
をうたう。少年少女に向かつて、「自由になりたくないか  
い」「思う様に生きたくないかい」と、挑発するかのよう  
にである。

今の子どもたちにとって学校は必ずしも居心地のいいも  
のではない。NHK第二回「小学生の生活と意識」調査  
（一九八九年）と「中学生・高校生の生活と意識」調査  
（一九八七年）によれば、小学生で「学校へ行く気がしな  
い」ことが「よくある」子は、5年前の二〇％から二七％  
へと増えているし、「楽しくない授業が多い」と答えた子  
が二六％いる。この調査によれば、学校へ行く気がしない  
ことがよくある小学生は生活のリズムが乱れ、楽しくない  
授業が多く、担任の先生もきらいで、学校の成績もよくない。  
学校の勉強や成績の負担感が強く、いじめられた経験  
を持つており、自己評価がかなり低い子に多いとなってい  
る。学校がいやだから生活リズムが乱れるのか、その逆な  
のかはここではわからないが、それ以外のことについては、  
実際に登校拒否をしている子どもたちに対するさまざまな  
調査の中でも指摘されていることだ（法務省人権擁護局監  
修／人権実務研究会編『不登校児の実態について』、東京シ  
ューレ『登校拒否の子供による登校拒否のアンケート』、森

田洋司他『不登校』問題に関する社会学的研究』。

中・高校生では、多くの子どもにとって学校は楽しい場である(「とても楽しい」「まあ楽しい」合わせて九一%)。ただし学校が楽しいのは、「友だちと話したり一緒に何かすること」や「課外の部活動」であつて、授業については「授業の自身が多すぎる」「生徒がわかっているかどうか、おかまいなしの先生が多い」「授業の進み方が早すぎる」などの不満が四割前後の生徒から出されている。だからか「学校に行く気がしない」ことが「よくある」六%、「ときどきある」一三%で、「たまにある」合わせる、五二%にもなる。そして驚くべきことに、四一%の中・高校生が何らかの体罰を受けている。

大学生たちに授業で「学校」という言葉で思い浮かべることを書いてもらうと、この二つの「学校体験」が出てくる。すなわち多くの学生がまず思い浮かべるのは、仲間と出会い遊んだ場としての学校(仲間としての学校)であり、次にみんなとつねに競争させられ、いやいやさせられた勉強(他律的な勉強Ⅱ学習)なのである。また現在の大学に對して、大学生・院生の一七%が「不満」と答えている(総務庁青少年対策本部『現代の青少年』一九九二年)。

尾崎豊はまさに、こうした学校とそれを容認する大人に

対するいらだちと不満の代弁者なのであつた。だからこそ「抑圧されている側の私たちには、尾崎の声が救いの声に聞こえた」(朝日新聞、五月四日付)のであろう。

ところで尾崎のもう一つの特徴は、教師や親のような醜い大人社会(学歴を肯定する社会)を批判しても、大人社会へとやがては巻き込まれて生きていかざるを得ない子どもたちのどうしようもない叫びを反抗的にうたっていることである。

否が応でも社会に飲み込まれてしまうものさ

若さにまかせ 挑んでいく ドンキホーテ達は

世の中のモラルをひとつ 飲み込んだだけで

ひとつ崩れ ひとつ崩れ

すべて壊れてしまうものなのさ(『Bow!』)

多くの青年たちは、受験競争の一端を担い子ども的人格をすら否定する教師や、モノ中心の生活と能力主義競争の論理で生きる親たちを、鋭い眼で見ながら生きてきた。しかし学校を卒業すれば、否が応でも尾崎が嫌っていた「薄汚い偽善者どもの仲間入り」(朝日新聞、五月五日付)をせざるをえない。だが尾崎はこんな中でも、「素敵な夢」や「自分を捨てやしない」ようにと、呼びかけている(『十七歳の地図』)。あるいは「街」という大人の世界から自分

たちを必死に守ろうとする少年少女の姿を、彼らのやさしさと愛のうちにみている(『I LOVE YOU』『はじまりさえ歌えない』『愛の消えた街』)。またグレテて学校をやめて大人社会の中で生きていかざるを得ない孤独なダンサーをもやさしく見つめている(『ダンスホール』)。

こうしたやさしさと愛もまた、今日多くの子ども・青年が求めてやまないものである。恵那教育研究所が行った「安心・不安の意識調査」(八七年実施)によれば、子ども・青年が今「自分が人間らしく生きるために大事にしたこと」として挙げた上位一〇項目のうち、「優しさ」と「愛」が上位二位を占めている。自分の存在を受け止めてもらえない学校と、その学校をあたかも下支えるかのような親たちの間で、彼らは人間が共同して生きていく上で最も大切な「やさしさ」と「愛」を求めているのである。

### ㊦ 占い・おまじない・前世を信じる女の子

今占い、おまじない、転生神話などのオカルトが若い女性たちの間で日常的に定着しつつあるように見える。ある女子大生は、「とにかくいまの自分がすつごくイヤ」で「占いをして自分はどうなるか知りたい」と、占い師のところに通っているし、二十九歳のキャリアウーマンも結婚

運を占いに通っている(『別冊宝島一一四 いまどきの神サマ』、那須ゆかり「おまじない少女と占いウーマンの幸せ?」)。また二〇歳の女性は前世では戦士サディヤという男性であり、ハルマゲドン(最終戦争)を前にして同志を求めて闘わなければと信じ込んでいるし、二一歳の女性も前世では戦士で巫女であったと信じている(『別冊宝島一一四 いまどきの神サマ』、新山哲「人類救済の戦士たちは、チョコパフェがお好き!」)。八九年八月十五日には、小中学生の女子三人が、死の寸前までいけば前世がのぞけると信じて、「シナリオ自殺」をはかるという事件まで起こっている。彼女たちは前世では王女で、「エリナ」「ミルシャー」などの名を持っていたという。ここで特徴的なのは、前世では「選ばれた人間」とされていることである。こうした世界はいわゆる少女マンガの世界にも反映している。今人氣のある日渡早紀『ぼくの地球を守って』(白泉社)は前世の記憶を持つ少年少女の自己発見と自己再生の物語である。またCLAMP『東京BABYLON』(新書館)三巻にも、前世を信じ自らを世界を救う戦士と思いつく少女が登場している。この物語そのものが、はるか昔から日本を霊的に守ってきた陰陽師皇一族の十三代目当主皇昴流(すめらぎ・すばる)がさまざまな霊を鎮めて

いくという「オカルト」的物語である。その中に、一九九九年に地球を滅ぼそうとする「奴ら」から、「選ばれた」人間である自分たちが「特別」な力で世界を救おうと夢想する三人の女子高校生が出てくる。彼女たちは「前世」でも世界のために闘った戦士だと思ひ込んでゐる。皇昴流たちとの闘いの中で、彼女たちは叫ぶ。「嫌よ……『普通』なんて……みんなと同じなんて嫌!」「私は『特別』なよ!お母さんやお父さんや周りのみんなみたいに『普通』になるのはいや!『その他 大勢』になつて無視されるのは嫌よ!」と。

なぜこうした世界にとりわけ少女が入り込んで行くのだろうか。それは、今日の学習指導要領の下で、科学的で合理的な思考そのものが衰弱させられてきたせいであろうか。もちろんそういう面もあることは否定できない。小中学校生活科の創設に典型的に見られるように、態度主義的な学習がもつぱら強調されているからである。しかしそれと同時に見逃してならないのは、一方では子ども・青年が今日の地球の危機（環境破壊、核戦争の危機）を敏感に感じ取るなかで「未来」を展望することができない状態に置かれてゐること、しかも他方では、学校を中心とした現在の生活の中で、周囲から肯定的に受け入れてもらえず、「現在」

の自分に自信がもてないでゐることである。

NHK調査によれば、中学生の二三%（高校生二六%）が「わたしが生きてゐる間に、日本が戦争をする」と思つてゐるし、また「わたしが生きてゐる間に、世界中を巻きこむ戦争がおきて、地球がほろんでしまう」と思つてゐるものは一八%（高校生一七%）ゐる。先の「安心・不安意識調査」でも、「今の生活で不安なこと」として、高校生の二一%、大学生の一八%が「核兵器があること」をあげ、また「将来の生活でも不安だと思ふこと」として、高校生・大学生の三一%が「戦争がおきそう」、「核兵器がある」をあげてゐる。また汐見椋幸氏らの調査（『占い・おまじないブームと子どもたち』、『子どものしあわせ』八八年一月臨時増刊号）によれば、第一に核兵器・戦争問題が子どもたちの一番の不安項目になつており（将来の核戦争がおこる可能性について、高校二年生では「とても不安」「ときどき不安」合わせて七四%）、将来の核戦争への不安がある者は、幽霊を信じたり、神頼みの傾向が強い（ただし非合理的なものに魅かれてゐる子どもすべてが世界の将来を憂へてゐるわけではない）。第二に、日常生活で「お金がない」「勉強がわからない」「自信がない」など不満が強い子は非合理的なものへ魅かれる傾向が強い。

今の子ども・青年が自分に自信がなく自己評価が低いことは、先のNHK調査でも指摘されている。小学生の高学年段階ですでに「得意なことや自慢できること」が「とくにない」子が、五年前の七%から二一%へと三倍増になっているし、また自分の性格を「あきやすい」とか「自分勝手」ともつばら否定的に評価する小学生が三三%もいる。

高校生では「あきやすい」六五%、「自分勝手」五二%、「しりごみする」四七%、「人を頼りにする」四八%となっている。大学生でも、卒論の指導の際に平気で「私バカだから」とか、自己紹介する時に「こんな性格の私だけだよろしく」などと言ったりする学生が出てきている。

このように自己評価が低くなる最も大きな要因は、小学校以来の「能力主義」競争である。この競争の中で、子ども・青年は偏差値という「巨大なモノサシ」（尾山奈々、『もし花を飾って下さるのなら』）によってたえず評価され、「できない自分」を見せつけられることで、次第に無能力感を獲得し、遅かれ早かれどこかの時点で自分を「見限る」ことを余儀なくさせられていく（一度目の「見限り」）。「どうせバカなんだ」「あたし（おれ）頭悪いんだ」と思い込まされ、そしてまたこういう否定的言説で自分を慰めてもいるのである。しかしさらに、二度目の「見限り」を

せざるを得ない時がくる。高校を卒業し就職や進学する時にである。いわゆる底辺高のツツパリの「非行少女」であれば、就職すらおぼつかない中で、「どうせ平凡な主婦にしかねないじゃん」というかたちで、自分を慰めるしかないのである（ツツパリからの「卒業」）。

このように、子ども・青年たちは一方では核戦争の危機によって未来に不安を抱えており、他方現在においては、自信を失い不安を抱えて生きていかざるをえない。そこである者たちは、先のマンガでの言葉のように、みんなと同じような「普通」の人間にされてしまう現在を逃れ、地球の危機を救うために、「前世」とそこでの自分の力を信じ、その力を借りてこうした危機を救おうと「夢想」することになる。またある者はこうした現実の不安から逃れようと「不思議」の世界（占い・おまじない・オカルトなど）や「虚構」の世界へと入り込み、そこにいわば「籠る」ことによって自らの心を癒し、安心を得ようとするのではないだろうか。いわば蚕が繭の中に籠るようである。

### Ⅲ たしかな友人関係を求めて

——「愛という名のもとに」が受けるわけ——

今、多くの子どもたちはできるだけ多くの人と仲良くし、

他人に思いやりを持つとうと、ふだん心がけている。NHK調査によれば、「ふだんこころがけていること」として、小学生の高学年の子どもたちの四四％が「できるだけ多くの人と仲良くする」をあげ、次いで二六％の子が「他人に思いやりを持つ」をあげている。友だちとの実際のつきあいでも、「いろんな人とつき合うほう」(六二％)が「決まった人」としか、つき合わないほう」(三三％)より多い。中学生では、親友がいない人は二％(高校も同じ)だが、悩みごとの相談相手として友だちを選ぶ人は、中学生五五％、高校生七四％であり、相談相手がいない人は、中学で五％、高校で四％いる(NHK調査)。総務庁青少年対策本部『現代の青少年』によれば、「心をうちあけて話せる友人」がいない人は、高校生では五％、大学生では三％である。また大学生で相談相手がいる人は七五％、いない人は二三％で、相談相手としては友だち六七％、次いで親一八％(全国大学生生活協同組合連合会「第二七回学生の消費生活に関する実態調査」一九九一年)となっている。つまり相談相手として友だちを選ぶのは五〇％ということになる。このように親友はいるのに、その人が必ずしも相談相手とはならないのはどうしてだろうか。それは、NHK調査の中学生の付き合い方に典型的に見られるように、親友の

場合ですら「なんのかくしだてもなくつきあう」子どもは半数をこえるものの(五三％)、「心の深いところは出さないうつきあう」二六％、「ごく表面的につきあう」一八％にもなっていることである。高校生では、「なんのかくしだてもなく」六七％、「心の深いところは出さないで」二〇％、「ごく表面的に」八％となっている。

では先の思いやりを持つことと、自分を出さないでつき合うということはどういう関係になっているのだろうか。これを解くキーワードは、依然として「明るい」・「暗い」のようだ。ある高校生たちの座談会によれば、「話が合うか、合わないか」が「明るい」「暗い」の基準で、「話が合わないやつは暗い」のである(『わが子は中学生』一九八九年二月号)。そこで、暗く思われないようにするためには、この人はこんな話が得意だから、この話をすれば話が合うだろうって、たえず相手に気をつかうことになる。つまり自分の本当の姿を見られて友だちを失わないようにするために、相手をいつも思いやり気遣っていないかならないというわけだ。ある女の子の次の言葉は、こんな子どもたちの心をはつきりと表している。「大事なことは相手を思いやること。いろんな経験してきたけど、生きるって大変なことだよ。しんぼうするきやないんじやないか

な」(宮川俊彦『心が壊れる子どもたち』講談社、より)。

でもこうした「思いやり」のなかで、いつも自分の素顔を見せないような大人びた「したたかさ」でみんなに合わせようとしても、時にはそんな付き合いが「疲れるなア」と感じるように重荷にもなる。「みんなはどうしてあんなに賑やかで明るいのが好きなんだろう。私も友達とお喋り好きだけど、あんなに明るくなれない。だけど一緒に騒いでいないと、みんなからのけ者にされそうで不安、だから無理しているところもあるんです。だからとても疲れる」(椎谷拓一『現代女子中学生気質』ダイナミックセラーズ、より)というようにだ。しかもこの子は「騒いでいるのは本当の私の姿ではないことをわかって下さい」と、訴えてもいる。

このように見てくると、今の子どもたちは、一方では自分を押さえて相手を思いやりながら、他方では「それは本当の自分じゃないのよ、わかっつてよ」と心の中で叫んでいるようである。実際、中・高校生は「友だちをしらけさせないよう(言動に)気をつけて」(五一%)いて、「友達と一緒にいるときは自分の思うようになかなか振るまえない」(二九%)し、「友達つきあいがわずらわしいと思うことがよくある」(二二%)のである(総務庁青少年対策本部

『青少年の友人関係』一九九一年)。

こうした状況は青年の場合も必ずしも例外ではないだろう。総務庁青少年対策本部『現代青年の生活と価値観』(一九八六年)によれば、一九歳から二八歳の青年の一番親しい友人との関係でも、「いつしよにいて疲れない」五六%、「お互いに悪いところは悪いといいあえる」五〇%、「黙っていても気まずくない」四九%となっはいるが、他方で「すべてはさらけ出さない」一七%、「けつこう気を使っている」一三%、「あまり深刻な相談はしない」一二%となっはいるし、「悲しいとき話を聞いてほしい」(五四%)と望んでもいるのである。

こうした友人関係があるからこそ、テレビドラマ「愛という名のもとに」が受けたのだろう。自分たちこそ本当の仲間だと思っていた大学ポート部の仲間七人(男三人、女四人)が、卒業して現実の社会に入っ、それぞれが自分の理想や思いどおりにはかない仕事上の悩みやさまざまなつらい体験にぶつかる中で分裂しかけるが、証券会社に勤める友人の自殺をきっかけに、それぞれが自分の本当の生き方を問い直し自立しながら、再び仲間としてむすびついていくというドラマである。ここには現代の学生(いや私たちにも)にはない真の仲間の再生がある。「愛という名



のもとに」失くした絆を再び見つけ出していくのである。

#### 四 元氣な女性、おとなしい男性

今日色々な場面で女の子の方が男の子よりも元氣だ。NHK小学生調査によれば、男の子は学校でも家庭でも勉強のプレッシャーを強く受けている。これに対してそうしたプレッシャーがない分、女の子はのびのびと自発的に勉強し行動的になっている。ただし言葉使いや行儀作法、手伝いに関しては、男の子よりも強く親から干渉されている。NHK中学生・高校生調査でも、父母が「わが子のことで

気になること」として、中学生の男子では「意志が弱い」「勉強が遅れている」、女子では「言葉づかいが乱暴」「意志が弱い」となっており、また高校生の男子では「意志が弱い」「生活が不規則になりがち」、女子では「言葉づかいが乱暴」「意志が弱い」となっている。つまり親たちは男の子には意志を強く持ち、勉強することを望み、女子には言葉づかいをというわけである。

なぜこうした違いが出るのか。それは親がまだ「男は仕事、女は家事・育児」という性別役割分業や「男らしさ」「女らしさ」に強くとらわれて、男の子には老後の面倒を見てもらいたいと思っ

ー編『核家族 その意識と実態』（日本放送出版協会、一九八六年）によれば、三〇代の妻の七割、夫の八割が「家事は女の仕事」と考えている。総理府「女性に関する世論調査」（八八年三月）によれば、三〇代の男性四一%、女性の二四%、四〇代の男性四九%、女性三三%が「男は仕事、女は家庭」という考え方に同感している。また男の子・女の子に対する教育方針でも「男の子は男の子らしく、女の子は女の子らしくしつけたほうがよい」と考えている人が、日本では六三%もいる（総理府『婦人問題に関する国際比較調査』一九八二年）。こうした親たちの意識は子どもたちに対する学歴期待の違いとなって現れてくる。NHK中学生・高校生調査によれば、男の子には四年制大学以上の学歴と安定した職業（公務員、技術者、サラリーマンなど）を望むのに、女の子には短大・高専までの学歴といわゆる女子向きの職業（OL、公務員、教師など）しか望まないのである。その上五割の親は今でも「長男には、ほかの子どもとは異なる特別な役割がある」と考え、老後は息子夫婦と同居したいと望んでいる（総理府『家族・家庭』一九八六年）。

こうした親の意識は子どもにもストレートに反映している。世田谷区「小・中学生の男女役割分業に関する意識調

「査」(一九八八年)によれば、小学生の三五% (男子四二%、女子二五%)、中学生の三〇% (男子三七%、女子二二%) が性別役割分業に賛成している。また性別役割分業について「合理的」と考える者が、一七歳の男子六七%、女子五七%、二二歳の男子六二%、女子五三%となっている(東京都生活文化局「若い世代の男女平等に関する調査」)。「男らしさ」「女らしさ」についても、中野区「小・中学生の性別役割分業に関する意識と実態」(一九八一年)によれば、小・中学生の男子にとつても女子にとつても「女らしい子」のベスト・スリーは「やさしい子」「すなおな子」「よく気がつく子」であり、また同様に「男らしい子」のベスト・スリーは「意志が強い子」「たくましい子」「勇かなな子」となっている。つまりすでに小・中学生段階で、子どもたちの多くがステレオタイプのな「男らしさ」「女らしさ」にとらわれているのである。また「男の子」「女の子」のしつけは「らしく」すべきかという点についても、一七歳の男子八三%、女子六五%、二二歳の男子八一%、女子七〇%が賛成している(東京都生活文化局、前掲調査)。

このように男の子たちはつね日頃からさまざまな期待を親たちから一身に受け、その期待を敏感に察しているがゆ

えに、自分の思いどおりに行動することをためらってしまふ。そして「男らしく」意志を強く持てとプレッシャーをかけられ、逆に萎縮してしまっている。これに対して、女の子は期待されていない分自由に意欲的に行動し、性別役割にも男子ほどにはとらわれてはいない。しかし「女の子らしく」というプレッシャーのなかで、その枠からはまだ抜けずには至っていない。

こうした男女の違いは、大学生になってもさほど変わらない。男子学生自身が「クラブ活動なんかでも女の子の方が元気なんだよ」と、言っているくらいである。それは第一に、男性自身がこれまでに植え付けられてきた性別役割観にとらわれて孤立しており、また友人関係に顕著にみられるように、その中でこれまでの自分を積極的につくり変えていくような関わり方をしていないからである。第二に、それを相対化する知識をこれまでの学校教育の中で得てきていないからである。短大・大学でも、八八年現在一三五校で二八〇の女性学関連科目が開設されて増加傾向にはあるが、まだ全体の一三%にすぎず、男性受講者も二〇%ではない(国立婦人教育会館「女性学関連講座開設状況調査」)。しかし私自身のささやかな教育実践(女性論)から言えば、彼らは大学に入って女性論や性差別問題を学ぶ中

ではじめて、学校教育の中で受けてきた性差別や生物学的な性差がほとんどないことを知るとともに、女性問題に対しても積極的な興味関心を持ち始めている。ただしそれはまだ女性問題に対してであって、必ずしも「男性自身の問題」としては受け止めるまでには至ってはいないようである。「男性学」「男性解放論」（メンズ・リブ）の積極的展開が求められているといえよう。

### おわりに

以上のような青少年の状況の中で、私たち大人・教員の側に求められていることとして、さしあたり次のようなことが考えられよう。第一に、彼らの不安を私たち大人も共有する現実的の不安として受け入れること、そしてその不安に寄り添いながら、彼らの生と自己を直接的な体験において豊かに育んでいけるように援助し、励ましていくことである。第二に、彼らの「学校体験」が授業を軸に喜び溢れるものに転換していくような教育実践が必要だ。「学ぶこと」の喜びと楽しさが獲られるような教育実践が求められている。また今国会で審議されている「子どもの権利条約」の精神に学び、個々の青少年の存在と自由な考え方が真に保障される学校・大学づくりが今求められている。彼

らの自己決定と参加する権利が学校の中で本当に保障されているのかどうか、大学も自己点検する必要がある。さらに青少年がそこに行けば、話し合える友だちや援助してくれる大人がいる、そんな「ティーンズ・プラザ」（東京都青少年問題協議会「現代青少年と性をめぐる社会的諸問題について」参照）のような居場所づくりも必要だろう。

第三に、友だち関係では、薀が巢籠りするように、その中で次への新たな飛躍への準備をするような孤独さを保障することが、今必要ではないか。友だち関係からくるさまざまな刺激から自分を守るためにも、またそうした刺激を自分の成長につなげるためにもだ。と同時に、自分を相手にさらけ出す術を身につけたり、仮面をつけたりはせずして、相手に素顔をさらけ出せるよう励ましていくことも、大切な。

最後に大切なのは、固定したさまざまな「らしさ」にとらわれずに、青少年の今ある固有の人生を豊かに育むという視点から、彼らに援助できることは何かを考えていくことだ。そして彼らと共に「人間らしさ」を考え追いつめていくことが、同時代を生きる人間として切に求められているのではないだろうか。女性学・男性学講座の開設などを通じて、私たち自身がまず自己変革する必要があるだろう。